巡り廻ってまた君と

曇犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巡り廻ってまた君と

【Ｎコード】
Ｎ５７０４Ｖ

【作者名】
曇犬

【あらすじ】
”朱（あか）”に所属する二軍隊隊長・淡（あわい）　緑芽（りょくが）は、１０年前の天災で両親を亡くし、双子の姉・淡　緑葉（りょくは）とも生き別れてしまった。
奇跡的に軍の人間に拾われた緑芽はその後どんどんと力をつけ隊長として働く傍ら、何年も姉を捜し続けている。
緑葉と出会える日だけを心に描いて……――

プロローグ

＋プロローグ＋

二人で悪戯をしたことを、君は覚えているだろうか。
二人で怒られて泣いたことを、君は覚えているだろうか。
二人で笑ったことを…君は覚えているだろうか。

オレは忘れられないんだ。
このごく普通の日常を、家族みんなで過ごしてきた事を。
朝昼晩、君と遊んでいた事を。

”天災”で全て壊れてしまった過去の時間を、オレは何年間もずっと追い求めている。

なぁ緑葉（りょくは）、『会いたいよ』……――

01

”レルー国”。
そこは2つの町［アセソル］［リュビア］だけで構成されている緑豊かな国。

何百年も前から、アセソルの人々とリュビアの人々は親しかった。
どちらの町にも軍が存在しているが内戦など一切することなく、両軍協力しあって時を刻んできたのだ。

――十年前までは。

＊　＊　＊

「っ…」

午前九時三十分、淡緑芽（あわいりょくが）は目覚めの悪い朝を迎えた。全身に汗が滲んでいる。

緑芽の住む町・アセソルは1年中暑く、汗をかいて起きることなど日常茶飯事だが、今日はただの汗ではない。

…冷汗だ。

「またあの悪夢か、…みっともねぇ」

誰もいない大きな部屋で、ぽつりと独り言を呟く。
家具の少ない部屋では小さな声でも、かなり反響した。

――ドクンドクン。

胸に手を当てるといつもより少し早く脈打つ心臓。
深呼吸を何回かするといずれ心臓は落ち着くが、もやもやとした霧が心に残る。

「あーっもうっ、ムカムカするなぁ…、誰かオレのサンドバックになってくれればいいのに…」

緑芽は笑みを浮かべながら恐ろしい言葉を吐き出した。
まわりにドス黒いオーラが漂っている。

そんな時、緑芽に歯止めをかけようとするように着信音が鳴った。
時計を見ると午前六時。連絡するにはだいぶ早い時間だ。

「こんな朝っぱらから誰だよ…」

濃い緑色の携帯を取り、画面を見ずに電話に出る。

「誰だお前朝から迷惑な奴だぜ。このオレに用とはよっぽどなものなんだろうなぁ…？」

『先輩に向かって何言ってんだお前っ』

「あ？…なんだ高上（たかがみ）副隊長か…。さーせん。つか1軍隊副隊長サンが何の用っすか？」

『なんだ、って…。発信者見てなかったな!?俺じゃなかったらヤクザだと勘違いされてたぞ』

適当に返事と謝罪をした緑芽に、呆れた声の1軍隊副隊長”高上空”。

緑芽の上司にあたる人物だが、この二人にはあまり上下関係がなく仲も良い。

「何の用です?オレも暇じゃないんすけど~」

『嘘つけ、どうせ暇だろ。…まぁ話を戻す』

真面目な口調になった空に、緑芽も大人しく耳を澄ます。

これほど早く連絡を、しかもメールではなく電話でしてくるということは、それなりに重要な話なのだろうと分かっているからだ。

『実はついさっき、情報を得たんだよ』

「情報?」

『あぁ、”お前にとっては”超重要な』

それを聞いた瞬間、緑芽の淡い水色をした眼が見開かれる。

携帯を握る手にも力が入った。

「まさか…」

『そう、お前の姉ちゃん――緑葉ちゃんの情報だ』

淡　緑葉。

その名を聞いた緑葉の脳裏に、６歳だった姉の姿が浮かぶ。今は、どんな姿をしているのだろうか。

どんな小さい情報でもいい。
どんな些細な情報でもいい。

「…教えてください」

02

「当たり前だろ、そのために電話したんだから」

珍しく優しく接してくる空に、気持ち悪さを感じながらも今は黙っておく緑芽。

その分、後で部下にチクってからかってやろう、と頭の中で考えていた。

ガキ精神が踊る。

「じゃあ早く教えろ…じゃない、教えてくださいよ」

『命令口調が聞こえたのは気のせいだよね、俺は仮にも君の上司だもんねっ』

「早くしろよ」

ぼそりと本音を言ってしまい、「あ」と慌てて自分の口を押さえる。

『開き直るなゴルァ！教えてやんねぇぞ！』

「申し訳ございませんでした」

情報のために、直ぐ素直に謝った。気持ちがこもっているかは別だ。

だが、たとえ形だけの謝罪だろうと、いつも緑芽にからかわれてばかりの空は気分が良い。

緑葉関係の話になると、緑芽は操り人形のように従順に従う。まさに部下の鏡。空の至福の時だった。

堅苦しい上下関係はなくとも、やはり上司らしくいたいものなのだ。

『実は朝方、”リュビア”に潜入してきたんだよ。夜中から朝方なら人も少ないし、俺がアセソルの人間だとバレにくいしな』

機嫌の良い明るい声で、空が話し出す。

緑芽は偉そうな空に若干不満が募るが、何も言わずに平然を気取った。

「まぁバレちまったら最悪捕まりますもんね、アセソルの軍である［朱］のオレ達は特に」

現在、リュビアにアセソルの者が入ることは許されない、アセソルの軍［朱］が入ることなど以っての外だ。という暗黙のルールがある。

逆にリュビアの者がアセソルに入ることも、あってはならない。

だが実際のところは、リュビアにアセソルの者が入ろうが法律では裁かれない。逆もまた然り。

このルールは、あくまでレルー国の民が勝手に決めたことだ。

『そうそう。法律に触れてないとはいえ、［朱］の人間だなんて発覚されてみろ、逮捕だぜ。テキトーに《お前はスパイだろ》とかな

んとか証拠にならない証拠を突き付けられて終わりだ。……ま、逆パターンも言えるけどな』

「リュビアの軍［蒼（あお）］がここに来たら、ここは混乱状態間違いナシ、ですもんね。それこそ、ここの駄目警察が取っ捕まえちまいますよ。…ってか、そろそろ緑葉の話をしやがれクソハゲ副隊長」

『全然名前違うからっ！！つかハゲてねぇし！綺麗な金髪なびいてるし！』

ツッこみまくる空の髪はなびくほど長くないが、まだ２２歳の青年だ。髪は余裕で生え揃っている。

『…ったく。今度こそ真面目に話続けんぞ。俺どこまで話したっけ？』

「リュビアに行ったとこまで」

『あーはいはい。んで俺はまだ暗い中、リュビアの状況を把握しようと飛び回ってたんだ。［蒼］の奴らが何か悪巧みをしてないか、とかな。で、その飛び回っている途中で…見たんだ』

緑葉を見たのか？と咄嗟に声を張り上げるところだったが、「違う」と返されるのが嫌で、ぐっと口を結んだ。

２軍隊隊長の実力は確かなものだが、メンタルは思うほど強くない。

牙を立て、誰にでも刃向かう猛獣のような性格のせいで、メンタルも強い強者だと誤解されているだけだ。

また、緑芽は弱い自分が死ぬほど嫌いなため、打たれ弱い部分を誰にも見せたことはない。結果、誰も知るよしないのだ。

「何を…見たんですか」

何を見たが気になって仕方ない緑芽は、直接的ではなく遠回しに質問をした。

声が裏返らないよう気をつけて、音を紡いだ。

一拍置き、ゆっくりと空は答える。

『後ろ姿しか見えなかったけど、薄い若葉色の…――お前と同じ髪色をした女の子だ』

「…っ、それはまじ、なんですか？」

『それは保障できない。だが、連れていた部下は若葉色の髪に水色の瞳をしていた、とも言っていた。お前と同じ色だ。別人だとも言えないだろう？』

確かにその通りだ。

だがその少女が本当に緑葉だとしたら、リュビアに住んでいるという事。

すなわち、今のアセソルと1番険悪な町にいるという事を意味する。

確かめたくとも、リュビアに潜入するのは簡単な話ではない。

緑葉の頭はパンク寸前だった。

『…ま、気長に捜していこうぜ。実はアセソルの何処かにいるかもしれない』

部下の気を知ってか知らずか、空は呑気に宥めた。

「有難う、ございます…。じゃあオレは二度寝するんで。お疲れさんです」

『朝から悪かったな。でもどんな小さな情報でも直ぐによこせって言ったのはお前だぜ?』

「わーってます。おやすみなさい、クソハゲ副隊長」

『だからハゲてな…っ』

最後まで聞かず、ブチっと電話を切った。同時に再びベッドに寝転がる。

ぐるぐるとする頭を整理をしようとするが、まったく整えられない。

すっかり目が覚め、寝ることも出来なかった。

「あー…、そういや今日上級会議じゃん…めんどくせ」

愚痴を吐き、［朱］の寮である自分の部屋の天井を、しばらくじっと見ていた。

＊　＊　＊

03

＊　＊　＊

「緑芽隊長おはようございます。…って、寝癖すごいですけど、どうしたんですか！？」

「はよ…。いやちょっと考え事してたら、仕事行く時間になってて急いで来たんだよ」

アセソルの軍、［朱］にて。

つい最近、１０軍隊副隊長に昇任した”夜咲（よざき）　花火（はなび）”は、寝癖がつきダラし無い姿をした少年とすれ違った。

［朱］の隊服である赤い模様の入った黒いパーカーも、肩からズリ下がり半分着られていない。

普通ならパーカーの中には指定の赤いＴシャツを着るのだが、緑芽はお構いなく紫のＴシャツを着ていた。

「隊長…、上級会議の日くらい隊服きちんと着てくださいよ…」

「パーカーちゃんと着てるからいいんだよ、赤だろうが紫だろうが、別にどうでもいいだろ。…あー眠ぃ」

空との電話後、二度寝でもしようと目をつむったが、つい緑葉のことを考えてしまい眠れず、今に至る。

いつも以上にハネた髪を手で整えながら、緑芽は「あ」と思い出す。

「そういや、夜咲は今日初の上級会議だったよな？」

それを聞いた花火は、照れながらも緊張した顔で頷いた。
年下に苗字を呼び捨てにされるが、それは今に始まったことではなく馴染んでいる。そのうえ、立場の関係上しかたない。

花火はそんなことよりも、１０軍隊副隊長から出席を許される”上級会議”を控え、胃がキリキリと痛んでいた。
自分は積極的ではなく、むしろ誰かに遣えている方が性格的に楽だと自覚せざるをえない。

「とても嬉しいんですが、自分なんかが上級会議なんてものに出席していいんでしょうか…。まだまだ心は脆くて弱いし、だから闘いも弱いし…」

「そうか？俺的にはそんな弱く見えないけどなぁ」

自分を責めつける花火に、明るい言葉が降りかかった。
きょとんとし、当たり前のような顔をした緑芽を見て、同情で言ったわけではないと分かる。

「まぁお前は人を従えるのヘタだけど、弱くはねぇだろ。だから副隊長に昇任されたんだろーよ、馬鹿か」

暗い花火の心がぱぁっと輝いた。

「緑芽たいちょーっ！感動しました、もうさすが隊長！部下の心のケアまでしてくれグフォッ」

「それ以上ひっついたら殺す。死にたくなければ今すぐ半径５ｍ以上離れろ」

殺気溢れる緑芽の瞳を見て、風のごとく逃げた花火。
彼が緑芽より2歳も上とは、誰もが信じられないだろう。

「…どいつもこいつも。［朱］はいつか馬鹿細菌が広まりそうだな」

目を細め舌打ちをすると、不意に背後に小さな気配を感じた。
［朱］の廊下にいるため敵の可能性は皆無に等しいが、緑芽はどこからか槍を出現させバッと襲いかかり、気配の主を壁に追いやった。

相手の首に先鋭な槍が光る。
刺さってはいないが、やろうと思えばいつでも殺れる位置にあった。

「ちょ、隊長…。すみません、私です」

「ありゃ、萌ちゃん?…どうしたの、そんなに気配消しちゃって」

「…消してるのにバレてましたか。私、気配消すのヘタなんですかね」

緑芽は槍をおろし、後ろに下がった。
持っていた槍は出現した時と同様、一瞬にしてパっと消えた。

これはいわゆる、魔法だ。

魔法の源は”強い意思”や”強い心”などという精神的なもので、全員が全員できるものではない。

魔法が可能な者は、武器などに自分の魔力を込め、戦ったり不可思議な事ができるようになる。

緑芽の得意武術は槍術で、槍では軍一の使い手だ。

「気づかれないように脅かそうと思ったんですが…」

「はは、そりゃ残念だったねぇ。いつ萌ちゃんに隊長の座持ってかれるか、ドキドキもんだぜー」

2軍隊副隊長・恋想（れんそう）　萌（もえ）は赤縁眼鏡をカチャリと上げ、とんでもありませんと俯く。

「脅かそうだなんて無礼でしたね。申し訳ございませんでした」

「別にいいよ、萌ちゃんはいつも仕事がんばりすぎだし～。真面目すぎて男寄ってこないぜ？」

「べ、別に男なんて興味ないですっ」

お団子にまとめられた桜色の髪を軽く降り否定するが、緑芽は「嘘つくなー」とからかっていた。まるで小学生のように。

「私で遊ばないで下さい！ほら、上級会議行きますよっ、まったく…」

「へいへい、分かりましたよーっと」

パーカーのポケットに手を突っ込み、緑芽はへらへらと目的地へ歩き出す。

萌はその後ろを秘書のようについて歩き、前にいる少年を見つめながら頬を染めていた。

この顔を見ると恋する少女そのものだ。しかし、萌の場合は少し違う。

（隊長…今日も可愛い！いや、でも戦ってる隊長は格好いいから…カワ格好いい！副隊長なんて…私って超いい立場いるわよねぇ。あー、もう少し若ければ漫画的展開を望めたのに…。てか、脅かそうとしたって咄嗟に嘘つけて良かったわ。本当は転んだフリして抱き着こうと思ったのだけどね。本当に隊長は2次元から出てきた美少年ね、妄想が止まらない…っ）

2軍隊隊長・恋想萌は、オタクであり、ただの妄想魔だった。

この事実を知るものは、世界中どこにもいない。

察しの良い緑芽でさえ、まったく気づいていないのだから。

＊　＊　＊

04

＊　＊　＊

「全員揃ったな？…よし、上級会議を始める」

赤が基調とされている大きな会議室で、長いテーブルを囲むように二十人の者が座っていた。
花火も縮こまりながら参加している。

いわゆる誕生日席と呼ばれる所には、四・五十代の大柄な男と、真面目な表情をした空が座っている。
この大柄な男は1軍隊隊長、”初一（はつひと）　壱郎（いちろう）”。この部屋の中で1番の権力を持つ。

「で、今回はなんの話し合いです？初一たいちょー」

謙虚のカケラもない口調で問う緑芽に、「チャラい！」と空のチョップが飛んだ。
緑芽はそれをひょいっとかわす。
しかし突然襲ってきた壱朗の拳は避けられず、緑芽のうめき声が響いた。

空はざまあみろ、とばかりにニヤける。

「いってぇ…、こんのクソオヤジっ！！」

「うるせぇクソガキ、ちょっと黙れや。鼓膜が死ぬ。というか、こんな殴打も避けられなくなったのかぁ？」

拳がヒットした頭を押さえ、涙目で壱朗を睨む。どうも今日は調子が出ない。

言い返しそうな若い隊長を萌が宥め、どうにか黙らせることが出来たが、緑芽は不満そうに頬杖をついた。

「さぁ馬鹿はほっといて会議を再開する。まぁ今回も［蒼］の話なんだが…」

［蒼］という単語を聞いた途端、全員の目つきが鋭くなる。空気が重くなり、お世辞にも居心地が良いとは言えない。緑芽はこの空気にいつまで経っても慣れないでいた。

「また［蒼］が騒ぎを？」

萌の発言に、壱朗は静かに首を振った。

「いや、逆だ。最近やけに大人しいんだよ。なんか企んでるのかもしれん」

「…あー、初一隊長。そいつ等が大人しい理由、オレ知ってるぜ？聞きたい？」

そう言った緑芽に一同の視線が集まる。

さっきまで殴られ機嫌が悪かったが、そんなこと無かったかのようにケロっとしていた。

それどころか偉そうに口角を上げ、勿体振りその先をなかなか言わない。

「教えてください」と言われたいのだろう。

その姿に呆れたように、壱朗が大きく息を吐いた。

「はん、てめぇの話はだいたいアテになんねーよ」

バチン、と緑芽の怒りパロメーターがはち切れた。

水色の眼を見下すように細める。

「このジジィ…っ、やっぱあんたが”育ての親”だなんてムカつく…！」

「はっは、勝手にムカついてろ、この万年ガキ病アホ息子」

壱朗は緑芽の育ての親だった。

十年前、当時6歳で身寄りのなかった緑芽を拾ったのだ。大天災の3日後のことだった。

幼い緑芽は傷だらけで会う人全員に警戒をしていたが、壱朗の家族や［朱］の人々が可愛がってきたため、次第に笑顔を見せるようになった。

今では笑顔どころか悪ガキだ。

「まじだぜ、この話！風の噂だけど」

「噂なのかよ。つか結局お前は何を知ってんだ」

空がすかさずツッこんだ。

「ここのトップ共は煩くて堪らねーなぁ、…まぁいいや。最近、［蒼］で”零軍（ぜろぐん）”っていうのが出来たらしいですよー」

「零軍？」

「零軍てのは裏組織的なやつっすよ多分。零軍のメンバーが誰なのかは、まったく分からねぇ」

ふむ、と顎を撫で、壱朗はあからさまに疑いの眼差しで凝視していた。

すぐにそれに気づいた緑芽は、喧嘩を売るように舌を出す。

誰もがガキ臭い、と思ったことだろう。

「あ、あの～」

遠慮がちな小さい声がした。

雨の音にも負けてしまいそうなか細い男の声だったが、確かに壱朗の元へ届く。

「ん、なんだ？１０軍隊副隊長も何か知っているのか？」

「ハ、ははは…！！」

今日初出席の花火は身体中を震わせながら、壊れたレコードのように返事をした。

対人ストレスに弱い花火には、数十人の視線にすら恐怖を感じる。

緊張の汗が頬から落ちた。

「オイ夜咲ー、しゃきっとしろ、しゃきっと。オレぁ頭痛いんだよ、早く会議終わらせてーんだよっ！」

花火が心を許せる人間の1人、緑芽に話しかけられ、少し落ち着きを取り戻す。

説教とも受け取れるが、花火にとって今はそんな事どうでも良かった。

”自分”を取り戻させてくれる緑芽に、ただただ感謝をするばかりだ。

「ぼ、僕もその零軍ってやつ聞いた…んです、が…」

語尾に続くにつれ声が消えかかってきたが、きちんと聞きとった緑芽が「ほれみろ」とばかりに壱朗を見る。

「夜咲も聞いたのかぁ。…じゃあ、その話は真実だな」

「じゃあってなんだ、じゃあって!!」

「あん?てめぇの話じゃ頼りねぇってだけだ。それにしても零軍…か」

本日何度目の言い争いなのか。他の隊長らは呆れながらも笑った。

「まぁ、とにかく。零軍ってのが出来たらしいから、それについて調べてくれ。情報を得たら直接俺に報告するように。…今回はこれだけだ。いじょーう解散!自分の仕事に戻れ」

「はい」

逃げるように出て行った花火を先頭に、ぞろぞろと人々が部屋を出て行く中、緑茶は椅子から立つ気配を見せない。

不審に思い、萌は緑芽の肩を叩く。

「隊長、どうしたんですか？」

心配そうに萌が緑芽を覗き込むと、ほんのりと赤くほてった頬が視界に入る。

心なしか息も上がっていた。

「や、なんか身体だるくて」

「え…」

その様子を見ていた空は、緑芽の若葉色の髪を軽くひっぱった。

ふわふわの髪はワックスをしなくとも、ぴょんぴょんとハネている。

「高上副隊長…暇なんすか？」

「忙しいわっ。でも可愛い後輩が仕事サボろうとしてやがるから」

「人聞きの悪いこと言っ…げほっ」

この怪しい咳で、二人は感づいた。

萌が緑芽の額に触れる。

真夏の日なたのように熱く、若干汗ばんでいた。

「ちょ、だいぶ熱いですよ！完璧に熱があります。だから今日は…」

「こんくらい平気。ほら、高上副隊長のチョップ避けれたの見たっしょ？そんくらいには元気だし」

萌が休んでくださいと言う前に、大丈夫だと主張する緑芽。

そんな少年に、空はやれやれと頭を抱えた。

「でも、初一隊長の鉄拳は避けられなかったよな？いつも避けられているくせに」

「…ほんっとにアンタはオレの邪魔をしやがりますね。空気読めよハゲ」

「だからハーゲーてーないっ！！見よ、このピカピカな金髪を！！」

「ほらピカピカなんじゃん。このハゲ」

「そっちのピカピカじゃねえよ！つかお前完全に敬語崩れてるし！むしろ暴言吐いてるし！」

兄弟喧嘩のように、いがみ合う二人。

大人げない兄と頑固な弟が、言いたい放題争そうのは平和な家族だけではない。

血で染まる軍の人間も同じだ。

二人から魔法や武器を取ってしまえば、普通の青年と少年。

しかし彼らと同年齢の者とは、こんなにも違う世界を生きている。

「とりあえず、げほっ、大丈夫だから。ごほっ」

「説得力無っ！！」

呆然と見ていた萌だが、仲裁をしようと二人の間に割り込む。彼らと私が兄弟だったら自分は仲裁役なのかしら、と思う半面、美少年２人が兄弟なんて２４時間パラダイスじゃない、と想像したのは秘密だ。

「隊長、今日はお休みください。壱朗隊長には、高上副隊長が報告してくださるので」

「…あ、俺がするんだ…」

ぼそっと呟いたが萌には聞こえず、空は渋々承知した。
萌と自分どちらが偉い立場なのか、考えるだけ悲しくなるだけだ。

「んじゃあ、お大事に」

それだけ言い残し、空は壱朗の元へ向かう。
隊長は稽古中だった１軍の隊員共をシバいているはずだ。きっと外にいるだろう。

「…さ、緑芽隊員。お部屋へお戻りください。２軍は私にお任せを。部屋まで１人で大丈夫ですか？」
「へーきへーき、ぶっ倒れるほど酷くないから。２軍隊頼んだぜ」

言葉とは裏腹に熱はそれなりに酷く、重い腰をやっと上げた。
同時に目眩が襲ったが、顔には出さずに自分の家へ歩みだす。

「寮が近くて良かった…」

緑芽は［朱］の寮で生活をしていた。
寮はマンションのように沢山の部屋があり、そこで暮らしている隊員は少なくない。
空や花火も寮住みだ。

「寮に帰ったらベットにダイブ決定。さっさと寝よ」

緑芽が熱を出すことは珍しく、この日、軍では驚きの声が絶えなかったらしい……――

＊　＊　＊

05

＊　＊　＊

レルー国西部・リュビア。
そこは一年中寒く、常に雨か雪の降っている町。マフラーは必需品だ。

今日も雪が景色を白く塗り、人々の肩や頭に着地していく。次第にそれは水に変わり、衣服や頬を濡らした。

そんな天候の中、一人の少女が早朝の空を仰ぐ。彼女の水色の瞳はどこか切な気だが、優しい眼をしていた。
何をするわけでもなく、じっと立っていた少女の背後に、二十代前半の男が現れ話しかける。

「また此処に来て空を見てたのですか」

突然現れた男に驚くことなく、少女は背後の人物の方を向いた。
軽くウェーブのかかった若葉色の髪が揺れる。

「…ここは空がよく見えるので」

少女達は古びた中学校の屋上に佇んでいた。周りには中学校より高い物がないため、建物に象られることなく大きな空が広がっている。
次から次へと、雪がひらひら舞い落ちて行くのが視界いっぱいに行き渡った。

「だがもう明るくなりますよ。［蒼（あお）］の”零群”である俺達は、そろそろ軍に帰らないといけません」

二人はお揃いの黒いポンチョに、デザインの似た服を着ていた。この服は正真正銘［蒼］の隊服だ。

ポンチョの左胸あたりには雪の結晶を模した［蒼］のマークが刺繍されている。

「はい”皐月隊長”、もう戻ります」

皐月と呼ばれた男は頷き、二人揃って屋上から隣の家の屋根へ跳躍する。隣といってもだいぶ離れていて、一般の人間技ではない。

しかし二人は顔色ひとつ変えず、普通に歩くように、軽々と飛んでいった。

＊　＊　＊

「あ、隊長達お帰りなさーい！」

「ただいま」

一際目立つ大きな蒼い建物＜蒼＞。

その中に少女と”皐月（さつき）　梅雨（ばいう）”は入っていった。

まだ朝早いということもあり隊員の姿はいつもより少ないが、キャラメル色の髪をした少年”繋親（けいしん）　友（とも）”が笑顔で二人を迎える。少年の丸く大きい目は、きらきらと光っていた。

「やっと帰って来てくれたねーっ、僕は貴女様が大好きすぎて寂グ

フォッ」

「［副隊長］と呼びなさい。というか何でタメ口なのよ。殴るわよ」

「いやもう殴られてるよ…。うぅ」

数メートル離れ尻餅をついた自分の部下を見て、私が殴ったのか、と気づいた少女。

白く細い彼女の腕でこんなにも吹っ飛ぶのが、［蒼］の人々は不思議でしょうがない。梅雨の藍色の瞳も、疑問と感心の色が浮かんでいた。

「って、あれ？副隊長サン、なんで仮面付けてないの？裏組織である零群は外に出るとき、仮面必須でしょ？」

尻を床に付けたまま、友は少女に尋ねる。

零群は顔を人にバレてしまってはいけないため、目の辺りを隠すための仮面を付けることが必要だ。現に梅雨の顔にはきちんと付けられている。

しかし彼女の顔に仮面はなく、綺麗な目鼻立ちはあらわになっていた。

「…無くした」

零群にとって大事な物を無くしたと言う少女の頭に、梅雨の拳が雷のように落ちる。

梅雨の顔は笑っていながらも、眼には怒りが潜んでいた。

びくり、と少女の肩がはねる。

「…なんでですか？」

拳が触れた頭から、寒気が駆け巡る。敬語が逆に怖い。
普段気持ちを表情に出すことが少ない少女だが、今は焦っている様子が顔に出た。
「助けなさい」という視線を友に送るが、立場的にも性格的にも友より上手の梅雨相手に、友が敵うはずがない。

友は両手でバツ印をつくり、少女に見せた。救いの手は諦めるしかないようだ。
しかたなく彼女は、嫌々事情を話すことに決める。

「休んでいる時に…、仮面が邪魔で放置していたら、いつの間にか消えてました」

「消えた？」

「はい。人の気配らしいものを少し感じて、振り返った時に無くなってることに気づきました」

彼女は軍の裏組織、零群の副隊長。裏組織は人に姿を見られてはいけないため、人の気配にはかなり敏感だ。そんな者が近くにある物を人に奪われる事など、まずない。
屋上から落としたのだろうか、と友はハテナマークを浮かべる。

「また、その時に金髪の男等数人が遠くに見えすぐに逃げたんですが、後ろ姿は確認されてしまったかもしれません。しかも、口元は手で隠せましたが、そのうちの一人に眼を見られた可能性が。零群の隊服は他の隊と違う上に公開されていないので、私が軍の者だとはバレていないと思いますが…」

「金髪の男達…ですか。と言ってもリュビア住みの一般人だという可能性が高いです。君を見たところで、家出少女だと思うだけで何も怪しまないでしょう。しかしアセソル軍［朱］の輩がリュビアへ偵察に来ない保障もないため、以後気をつけてください」

「はい、申し訳ございません」

梅雨も金髪の男等が気にはなったが、そろそろ零群の仕事時間が終わるため余裕がない。

「あと仮面のことは1軍隊長に報告して新しく貰います。が、仮面を無くすのは零群としてはあってはならないこと。反省文ニ枚を言い渡しますね」

「え、あの…五枚じゃなくて宜しいのですか？規則では確か五枚だったと思うのですが」

「別にいいんじゃないですか？めんどくさいし…ね。そういう事でもう帰って休んでいいですよ。お疲れ様」

本当なら仮面を無くした場合、反省文は五枚だ。だが梅雨はいい加減な要素があるため、処罰も気分によって変わる。

「有難うございます、隊長」

反省文五枚は予想以上に厳しい。それに比べニ枚なんてあっという間だ。

ホッとした少女は緊張の糸が切れ、眠気が襲ってきた。

夜から朝早い時間までが零群の活動時機。そろそろ普通の隊と交代の時間だ。

眠そうな少女に便乗した友も、わざとらしく欠伸をし、帰ろうとする彼女の後ろへ続く。

「じゃあ僕も帰…「君は七軍隊隊長なので駄目です、友」

七軍の仕事はまだ始まったばかりですよ、と梅雨は友の衿を掴み、ズルズルと持ち場へ引きずった。

友は頬をぷくーと膨らませ、されるがままに連れて行かれる。

［蒼］のこんな日常に少女は息を吐き、隊服であるポンチョを脱いでから私物のコートを着た。一般人に軍人だと知られてはいけないからだ。

それから早々と帰り支度をし、近間の窓へ向かう。窓を全開にしてから頭だけ出し、真下を見下ろした。番人が一人いるだけで障害物は何もない。

それを確認した少女は躊躇することなく、四階の窓から小柄な自分の身体を投じた。

空から落ちる雪に紛れながら重力に身を預け、無事に地面へ着地する。

四階の窓から降りたにも関わらず、地面とブーツがあたった音が若干しただけで、ほぼ無音だ。

着地地点のすぐ後ろにいた＜蒼＞の番人の男は、突然目の前に現れた人物に驚倒し顎が外れそうなほど口を開く。彼は心臓をバクバクとさせながら少女に叫んだ。

「ちょ、副隊長ーっ！どこから来たんですか！」

「……あっち」

「あっち…って、思いっきり副隊長の指は上を指してますね…。窓から降りるとまた1軍隊副隊長に怒られちゃいますよ」

番人の予想通り、忠告しているそばから、光り輝く怒りの剣が上から落ちてきた。偽物などではなく、本物の剣だ。

半泣き状態の番人をよそに、少女はそれを華麗にかわし、剣はガズリと地面に刺さった。

剣を落とした主はたっぷりと空気を吸い、鼓膜が切れんばかりに爆音を放った。

「コラァア！窓から降りるなといつも言ってるだろ！エレベーター使えばすぐ一階に着くのに、なんでわざわざ窓から帰るんだよお前は」

二階の窓から身を乗り出し、赤毛の女――1軍隊副隊長”重衣（かさい）羽織（はおり）”が少女に怒鳴る。女は男のようなベリーショートで男のように見えるが、顔立ちは美しく軍では頼れる女性だ。

そんな彼女は少女にとって姉のような存在でもあり、女二人で同棲もしている。

軍の中でも地位のある二人はがっぽりと給料があり、住んでいるところも高級マンションだ。

「私は先に帰ってるよ羽織。：じゃない、羽織副隊長。あと剣は大切にしてくださいね」

呼び方を訂正し、長いツインテールをひるがえす。

魔法の使える羽織は、落とした剣をマジックのようにパッと消す。

だがマジックとは違いタネも仕掛けもない、魔法。
剣は異次元に飛ばされ、自由自在に出したり消したりすることが可能だ。

「余計なお世話だぜ」

そう言い返してから、羽織は諦めたように頭を掻き、「日本酒冷やしとけば、今日は許してやんよ」と言い窓から遠ざかった。
なんだかんだで［蒼］の人間は、まだ若い少女に甘い。

「ったく…昔から生意気だよな、あんのマセガキ」

羽織はデスクに広がる書類の山を見て見ぬふりをし、ドカッと椅子に腰掛けた。ふかふかのクッションは彼女を軽々と受け止める。

窓から見える雪を眺めながら、羽織は独り言を呟き始めた。

「…何がアイツをあんなマセガキにしたんだろうな。ただの十六歳のガキを…さ」

軍(ここ)にいなければ、少女は笑って学校に行っていただろう。たった一度の青春を謳歌していただろう。魔法を使って武器を持つことも、血に染まることも、無かっただろう。

あの天災さえ無ければ、きっとあの子は純粋で綺麗な世界を生きていた。

「なんでそんな強くなっちまったんだよ――”緑葉”」

泣いて此処から逃げるような、弱い子であって欲しかった。そう

すれば、汚れや闇を見なくて済んだから。

「とんだ馬鹿を拾っちまったよ。あたしはほんと、何やってんだか…」

天災で双子の弟と別れた少女、”淡緑葉（あわいりょくは）”。

彼女は重衣羽織に拾われた後、［蒼］の零群副隊長となり、軍人になった。

そんな忙しい傍らで、たった一人の弟を探し回る日々。

片割れのいない双子が再び出会う日は、いつになるのだろうか―

―…

06

＊　＊　＊

色とりどりの花が咲き、緑が国をつつむ十年前の春。リュビア寄りのアセソルにて――

淡家は整理整頓がされた家で、家族とまったりと過ごしていた。一家を支える大黒柱・淡（あわい）　緑風（りょくふう）と、その妻で綺麗好きな淡　可憐（かれん）は双子の子供に囲まれて忙しくも幸せな時間を噛み締めている。

双子は六歳になり、やんちゃ盛りだ。

「父さんっ、緑葉が僕のクレヨンとったぁぁ」

双子の弟、緑芽が喚きながら父親に訴えるが笑って宥められる。姉の緑葉はクレヨンで悠々と絵を描いていた。

「ほら緑芽、泣かないで。美味しいスコーンと紅茶つくったわよ。緑葉もあなたも食べましょう」

大好きな母親に呼ばれ、緑葉はすぐに作業を止め寄ってくる。姉に負けじと、緑芽も走ってきた。

子供がいるとは思えないほど、若く美人な可憐。家族想いの優しい妻に、夫の緑風はいつまで経ってもベタ惚れだった。

「今日も母さんが作るおやつは美味そうだな二人とも」

「「うん！」」

「みんなったら、またまた～、でもそれは良かった。温かいうちに召し上がれ」

笑いの絶えない幸福な家族。

まるで絵本の物語のように、何もかも上手くいっていた家族。

――それがたった六年で終わってしまうなど、誰が解るだろう。

「あ、そうだ。一週間後は風樹（ふうじゅ）叔母様の結婚式だから、今からみんなでお祝いのプレゼントを買いに行かない？」

風樹とは緑風の妹で、双子からすると叔母にあたる。

可憐の突然の提案に、いち早く反応したのは緑葉だ。スコーンを紅茶で胃へ流し、瞬時に右手を上げた。

「緑葉行きたい。風樹叔母様へのプレゼント選ぶ！」

瞳を輝かせる緑葉に、緑芽は不満そうに口を尖らせる。

双子といえど、性格や考えが同じとは言えない。

「今度でいいじゃん、僕は家で遊んでいたいっ」

「やーっ行きたい！」

頬を膨らます緑芽に、瞳が潤みだす緑芽。

このままでは喧嘩になるため、可憐が割り込む。

「じゃあ…、緑葉は母さんとお買い物に行って、緑芽は家で父さんに遊ぶのはどう？」

緑風はうんうんと頷く。双子も申し分なさそうに黙った。

可憐は「うん、決まり！」と言い、ハニー色のエプロンを外し、結っていた長い金髪を解く。

色は違うが、ウェーブのかかった髪は緑葉とそっくりだ。

「お金持ったし…、行こうか緑葉」

「うんっ」

親子は仲良く手を繋ぎ、近くのデパートまで出かけに行った。徒歩でも家からは十分余りで着くだろう。緑芽の小さな歩幅でも余裕で歩ける道のりだ。

残った緑風は、息子の自分より明るい緑髪を撫で話しかける。まだ二十代の緑風の手は、長い指に綺麗な手をしていた。左手の薬指には愛の証が輝いている。

「何して遊ぶ？」

「遊ばない」

「…え」

さっきと言っていることが変わり、緑風は無意識に苦笑いを浮かべる。

「僕は父さんに、聞きたいことがあるんだ」

幼いながらに真面目な顔した息子に、緑風も表情を引き締めた。
クリクリとした丸い眼と視線が合う。
どんな事を聞きたいのか、予想がつかない。

「あのさ…、どうやったら緑葉のこと守れるの？」

「へ？え、えーと…、どうしたんだよいきなり」

マセたことを言い出す緑芽に、戸惑う脳内。
当の本人はきょとんとして返事を待っていた。

「だってテレビで、好きな子は守らなければいけないって言ってたんだもん。父さんは母さんが好きで守ってんでしょ？だから守り方教えてほしいの。僕も緑葉のこと大好きだから」

きっと昼のドラマで、そんな事を学んだのだろう。
確かに緑風は妻を愛し、永遠に守ると決めている。が、それを子供に言われるのは、なんとなく照れる。
頬を指で掻きながら、緑風は天井を仰いだ。

「俺が可憐に対する”好き”と、お前が緑芽に寄せる”好き”は別な気がするけど…まぁいいや。守る方法かぁ…」

いざ考えると、なかなか難しい質問だ。

強くなる？
誰にも負けない？
誰も寄せつけない？
――いや、違うな。

真剣に考え、あるとっておきの方法をみつけた。
普段からしていて、身近で単純すぎることだ。

「教えてあげるよ緑芽。大事な人を守る方法」

「ほんとっ？」

「あぁ。――”傍にいて、泣かせない”ことだ。緑葉にずっと笑っていて欲しいだろ？」

緑芽は姉の微笑んだ顔を思いだし、コクリと頷いた。
すると緑芽の身体が、羽が生え飛んだように浮かび足が床から離れる。緑風が脇を持ち、抱き上げたからだ。

「しっかり、緑葉を守るんだぞ」

緑風の青色の瞳が、優しく諭した。
その眼は今までで一番美しく、緑芽の記憶に深く刻まれる。

「わかったよ父さん。約束する！」

「よしいい子だ。――じゃあ母さん達が帰ってくるまでキャッチボールしようか」

「やったぁ！」

庭へ急ぐ親子の姿。
二人を見下ろす蒼かった空は、灰色に染まり始めていた。
もやもやと、少しづつ、少しづつ蒼を濁らせていく無彩色。

これが全ての希望を壊す、地獄の予兆だった――…

＊　＊　＊

「歯は磨いたか？サボると虫歯になってしまうぞ」

「「はい父さんっ」」

「パジャマのボタンはちゃんと閉まってる？かけ間違えていないかな？」

「「はい母さんっ」」

「では、みんなで寝ましょうね！」

外は暗く、月光が最高に輝く静穏な夜。
淡家では家族揃って、同じ部屋に四枚の布団を敷いていた。
普段は夫婦、子供で別れ寝ているが、今日は双子の要求で家族全員で眠ることになったのだ。
まだまだ甘えたい歳なのだろう。

「お布団から太陽のにおいする。緑葉ね、このにおい好きーっ」

緑葉はくんくんと仔犬のように布団を嗅ぎ、嬉しそうにはにかんだ。よく晴れた日に干した時の太陽のにおいが、緑葉のお気に入りだ。

「僕は家族のにおいが好き」

「なにそれー？母さんからも父さんからも、においなんかしたこと

ないよ」

「するよ、なんか良いにおいなの」

左から緑風、可憐、緑芽、緑葉と並び、双子はワクワクとして眠る気配がない。

人数分の布団があるにも関わらず、緑芽と緑葉は一つの寝具に潜っている。

隣で横になっている可憐は、はしゃぐ子供達に明るく話を振った。

「緑芽達の将来の夢って何？やっぱり父さんと同じ魔法の使える警察官？」

緑風は正義感が人一倍強い警察官。

魔法も使え、タネも仕掛けもない奇術で子供達をよく驚かせていた。

時には異次元を使って物を消したり、普通の人間とは比べものにならない身体能力を披露している。もちろんこの身体能力も魔法の力だ。

緑芽はにへらと笑いながら、かぶりを振った。

「違う。僕は緑葉と同じ仕事するの」

「はい？」

予想外すぎる言葉が返ってきて、気の抜けた声を発した両親。緑葉は瞬きをパチパチとした。

何をするにも緑葉の名前が出る緑芽に、いつか「緑葉と結婚する」

と言い出すのではないか、と可憐は心配になる。少なくともシスコンはもう免れないだろう。

「なんで緑葉と同じ仕事がいいんだ？」

「ん？それは緑葉が大好きだからだよ。だって父さん、傍にいて泣かせちゃ駄目って言ったじゃん」

「いや確かに言ったけど…。そんな四六時中いっしょじゃなくて良いんだぞ」

「ためだよ！いつなにがあるか分かんないんだからね！」

いっちょ前なことを言う少年に、緑風は曖昧に返事をする。納得もできる言葉だったからだ。

可憐はくすくすと微笑しながら、近くの時計を見た。六歳の幼い子供はとっくに寝る時間だ。

「――もうこんな時間。緑葉、緑芽、もう眠りなさい？良い夢をみてね」

「えーまだ話したいよ」

「駄目よ緑葉。明日は叔母様の結婚式よ、よく寝てスッキリした顔で御祝いしてあげなきゃ」

「…はーい。おやすみなさい」

まだまだ話足りなかったようだったが、小さい身体は疲れている。

双子は数分で寝息をたて始めた。

可憐も明日に備え、早めに寝付こうと体制を整える。

だが緑風が可憐に声をかけた。

「可憐、子供っていつのまにか成長しているんだな」

子供を起こさないよう、蚊の鳴くような声で話す。

「ふふ、そうだね。［いつなにがあるか分からない］、だっけ？緑芽ったらどんどんいろんな言葉を覚えていくわね。言ってることは間違ってないけど」

「あぁ。子供に教えられることも本当にあるもんだ。特に俺は警察官だし、仕事中に何があるかなんて神様しかわかんない」

「緑風、そういう事は言わないの」

ムッと可憐が顔をしかめたのが、薄暗い中でも分かる。緑風は素早く謝罪した。

「ごめん。でもだからこそ、言える時に言わなきゃいけないと思ったよ」

「なにを？」

「愛してる、って。可憐、今もこれからも傍にいるよ」

「っ…！？いきなり何、恥ずかしい人ね」

青春を生きる高校生のように、赤くなる可憐の頬。
そんな彼女の額に緑風は口づける。くすぐったそうに可憐は顔を背けた。

夢の世界を満喫している緑芽は、そんな甘い状況など知るはずもなく、突然「”雪月花（せつげっか）”様ぁ…」と寝言を呟いた。
雪月花とはレルー国のトップにあたる人物で、民は雪月花を神のように崇めている。緑芽もその一人だ。だが雪月花は謎多き人でもある。出身などの個人的な情報どころか、体格がまるで解らない服を着ているため性別まで知られていない。解っている事は光のような色素の薄い金髪に、レルー国を映したような鮮やかな緑の瞳をしているということだ。
それでも民は、東軍［朱］と西軍［蒼］をまとめあげる雪月花を尊崇している。

「緑芽は雪月花様が本当に好きだな。子供まで魅するとは流石は雪月花様。…さて、そろそろ俺達も寝ようか」

「素晴らしいお方だもの、六歳児だって尊敬しちゃうわ。では…おやすみなさい」

「おやすみ」

――家族揃って眠った夜。
少し身をよじれば触れる人の肌。
暖かくて、安らいで、なによりとにかく愛しくて。

双子達はこれからの未来、学校へ行ったり、親に反抗したり、何通りもある人生を歩んでいく。

それが運命であり当然。考えるまでもない。

そのはずだった。

国が狂って、何千人もの命が失われた「ライトニングディ」を迎える日は、刻一刻と近づいている――

07

＊　＊　＊

「初めて結婚式に来たけど、こんなにケーキが美味しいんだね！ね、緑芽」

「うん。母さんの作るお菓子くらい美味しい！此処、えーと…シキジョーだっけ？も大きくて奇麗だし。けど飽きてきた」

きらびやかな装飾、気品溢れるドレスやスーツを着た人々、そしてご馳走に魅入る緑の双子。

緑芽は女の子らしい桃色のワンピースを着ているが、今にも食べ汚しそうだ。緑芽のタキシードも危うい。

「ちょ、二人ともっ、どんだけ食べてるの」

いつもより服装と化粧に気合いを入れた可憐が子供にかけよった。可憐と話していた女性達は「可愛いわねー」と笑う。

緑風は妹で今回の主役である風樹に会いに行っており、可憐は世話と挨拶で大忙しだ。

そんな中、緑芽がだだをこねだした。

「母さん、緑葉といるのは楽しいけど、なんつまんない。お腹もいっぱいになっちゃったし、もう帰ろー？」

「いや、メインの風樹叔母様見てないでしょ？でも確かに緑芽達には少しつまらないか…」

大人ばかりで玩具などない式場だ。六歳の子供には暇な場所だろう。

緑芽はそれなりに式場を面白がっているが、それも時間の問題でいつかは飽きて泣き出す。

しばらく考えた可憐は、ハッと思いついた。

「じゃあ、お祖父様のとこ行きましょうか！一年ぶりだし、きっと喜ぶわ」

「風流（ふうりゅう）お祖父様!?行く！緑葉も行くよね？」

「行く！ずっと会いたかったの。早く行こうっ」

風流とは緑風の父であり、双子が大好きな祖父だ。祖母は二人が幼い頃に病気で亡くなったが、風流は妻の分まで孫を大切にしている。

現役の警察官で、頼れる人物だ。

「緑芽、緑葉。あそこにいるわよ」

「「お祖父様！」」

目をキラキラとさせ駆け寄ってきた双子に、風流は驚いた様子で口をあんぐりと開ける。そして来た子が誰か分かった瞬間、嬉しそうに孫達を抱きしめた。

一年の間に双子の身長は伸び、少しだけ顔も変わった。しかし人懐っこい性格までは変わっていない。

「緑葉も緑芽も久しぶりだなぁ！後で会いに行こうとは思っていたが、まさか来てくれるとは。元気だったか？」

「「すごく元気だったよ！」」

見事なハーモニーに感心しながら、風流は視線をずらし可憐を見る。

優しい表情をした可憐は、軽くお辞儀をした。

「お久しぶりですお義父様。風樹ちゃん、素敵な旦那さんに出会えて良かったですね」

「あぁ、奴はきっと風樹を幸せにしてくれるだろう。…式場に来ると可憐ちゃんと緑風の結婚式を思いだすよ。ついでに、可憐ちゃんの過去もな」

［過去］という言葉に、ピクリと反応する可憐の耳。澄んだ水色の眼もどこか鋭く光った。

「ふふ。過去は振り返っちゃいけませんよお義父様。前を見て生きることが大切ですよ」

「いや、たまには振り返ることも大事さ。…九年くらい前だっけ？まだ君は十八歳で、わしに事情聴取されていたのは。まったくあの時の可憐ちゃんはやんちゃで困ったなー」

「そういえば仲間連れてバイク乗ってましたね。まったく怖いわねぇ私ったら」

可憐は穏やかで誰もが羨む美人な女性。――になったのはつい最

近の話で、結婚を控えた二十歳の頃。
それまでの彼女は誰もが恐れる”女番長”だった。暴れ回っては通報され、警察に捕まる毎日だ。
そして毎回、可憐の担当を務めていたのが未来の義父となる、淡風流だ。
全てはそこから始まった。

「でも元ヤンキーだったの、後悔してませんよ。じゃなかったら緑風と出会えませんでしたし」

軽くノロける可憐に、風流は盛大に腹を抱えて笑う。双子はまだヤンキーというものを知らず、不思議そうに瞬きをした。

そんな時に靴の音が近づいてくる。——緑風だ。

「親父、風樹が待ってるよ。…って、可憐達もいたのか」

「えぇ、ちょっと昔話をしてたのよ。そんなことよりお父様?早く風樹ちゃんのところに行ってあげてください」

「娘を嫁がせるのはやっぱ寂しいが…行ってくるよ。あ、緑葉、緑芽。式が終わったら遊ぼうな」

「「うんっ」」

ごつごつとした手で頭を撫でられ、双子は無邪気に笑う。何をして遊んでくれるのか、とにかく楽しみだ。
もしかしたら、どこかに連れて行ってくれるかもしれない。

風流は数歩進んだところで振り返り、名残惜しそうに呟いた。

「二人とも、行きたいとこ考えておいてな」

明るい顔をした双子達とは真逆で、空はどんよりと曇っていた。

＊　＊　＊

まったりとした曲が流れ、式場の扉が開けられた。先程まで落ち着きを忘れ、時計ばかり見ていた新郎は息を呑む。

人々がほうっと見とれる視線の先には、純白のウエディングドレスを着た風樹と、見るからに威厳の強そうな風流が立っていた。

「風樹叔母様かわいーっ」

美しいドレスに頬をピンクに染めた緑葉は、気持ちが高ぶり緑芽に抱きつく。緑芽は興味がなさそうに欠伸をした。

花婿は途中まで父に連れられ、新郎の元まで歩く。

そこからはお決まりの言葉と誓いをし、子供にとっては長ったらしいが感動のある時間だった。

涙する花嫁からもらい泣きをしている女性達や、幸せそうに微笑む人々。まさに喜びの塊だ。

灰色の曇り空なんて、ここにいる誰もが忘れていただろう。

そしてついに最後の締め、フラワーシャワーの時間になった。

「母さん、僕も外行くの？」

可憐はコクリと頷く。面倒臭そうに緑芽は頭を掻いた。

外はぞくぞくと人が集まり、相変わらずの空模様に負けないくらい盛り上がっている。

しかし、――”悲劇は起きた。”

「なんか雨降ってきたか？」

緑風がそう言い終わった途端、雨がバケツをひっくり返したように土砂降りになった。緑芽の心に何か嫌な予感がよぎる。

あっという間の出来事に、人々は混乱した。

「みなさん！フラワーシャワーは中止します！式場に戻ってください」

避難しているそばから、ピカッと視界が光った。次に猛烈な轟音が駆け巡る。しかもその光と音は止まる気配を見せない。

緑葉は悲鳴をあげ、可憐の身体に手をまわす。緑芽も緑風のスーツの裾を握った。

不意に起こった雷に、一段とパニックになる集団。我先に安全な式場へと入ろうとするばかりに、秩序が破綻する。

だが、安全だと思われていた式場まで地獄は襲い掛かった。

鼓膜が契れんほどの爆音をたて、雷が式場に命中したのだ。中にいた人と近くにいた何人かの者が、痙攣をしながら倒れている。叫び声が響き渡った。

［これはもうただの雷ではない。］誰もがそう察した。

緑葉は近くにいるはずの緑葉の手を握ろうと左側を見たが、そこに彼女の姿はない。可憐もいっしょにいなくなっていた。ゾッ、と恐怖にも似た寒気が少年の背中に襲い掛かる。

「緑葉…？」

慌てて右手を強く引いて父親を呼ぶ。心臓はバクバクと脈打っていた。

「ねぇ父さん！緑葉と母さんがいない…っ！早く、早く探さないと…！」

可憐と緑葉は混乱する者達の波に、のまれてしまったようだ。彼女達もきっと緑葉と緑風を探しているだろう。

「落ちつけ緑芽。大丈夫だ、きっと見つかる」

口ではそう言っている緑風だが、青い瞳には動揺の色が浮かんでいた。

そんな時、視界の端で赤色が現れる。同時に男の太い声が聞こえた。

「か、家事だ…式場が燃えているぞ！ここは危険だ逃げろ！」

直撃した雷が原因で、みるみるうちに式場に炎が広がってゆく。実は家事になったのは此処だけではなく、レルー国全域に雷が落ち、家事になっていた。

結果、たくさんの人が消防へ電話をかけたため回線が狂い、電話

が繋がらない状態になっている。

「まだ中に子供がいるの！お願い離して…っ」

「いやもう駄目だ…炎が強すぎる。あんたも死ぬぞ！」

式場で小さな少年が一人、炎の隙間で倒れていた。

そしてその子の親が泣き叫びながら暴れ、それを必死に止める男性がいる。親は意地でも助けようとしているのだろう。しかし男性の言う通り、下手をすれば助けだそうとした親の命まで危険だ。

頭が真っ白になり固まる緑芽の名前を、緑風が呼んだ。彼は息子の目の高さと合わせしゃがむ。

「緑芽…よく聞け。お前は今から、走って建物がない所へ行くんだ。とにかく物がなく低い場所を探せ。分かったか？」

震える唇をなんとか動かし、緑芽は父親にすがる。

「父さんも…僕といっしょに逃げるよね…？」

緑風の首は、縦に振られなかった。ついに緑芽の丸い眼から、涙がぼたぼたと流れる。

「なんで？どうして…っ？父さんも行こうよ！母さん達を探そうよ！」

「緑芽…早く逃」

「お願い！もう何も悪戯しない。我が儘言わない。いい子でいるか

ら…だからいっしょに逃げよう」

「緑芽！」

この時初めて緑芽は、父親の怒鳴り声を聞いた。けれどまったく怖くなかった。

怒鳴られながらも、ぎゅっと抱きしめられたから。

「「緑葉のそばにいて、泣かせないこと」って約束しただろ？お前が怪我したら、緑葉はきっと泣くぞ。お前が泣かせてどうすんだ。だからまずは自分の身を守ってから緑葉を探せ。大丈夫だ、緑芽はいい子だから神様が護ってくれるよ。…ほら、俺は後から行くから逃げなさい」

緑芽は解放され、背中をポンと押される。涙でぐちゃぐちゃの視界で、父親の優しい顔が見える。

少年の目つきが変わった。

「…分かったよ父さん。だから絶対、後で会おうね」

「あぁ。さぁ早く行くんだ」

息子の小さな背中を見送り、緑風は安心したように微笑んだ。

それから式場を一瞥し、ずんずんと近付いて行く。煙が肺に入り込む。

「ちょっと君…！中に入ってはいけない！」

今だに暴れる親を捕まえていた男性が緑風に訴える。が、まった

く動きを止めることなく男性に言った。

「大丈夫です。少しなら魔法が使えるんで、これを使って今から中にいる方々を助け出します。警察は市民を助けるのが使命ですから」

――”緑彼、緑葉たちをよろしくな”。

何人もの人を救い出し、後(のち)に［警察官の師］と呼ばれる彼は、それが最期の願意となった。

＊　＊　＊

乱れる呼吸。感覚のない足。地面を濡らす涙、
若葉色の髪をした少年は、何もない平野で震えていた。
ここまで来るまでに何回も転び、あちこちに怪我をしている。

「父さん…母さん…緑葉…」

何度この名を口にしただろうか。
雷鳴に掻き消されながらも、暗示にかかったように繰り返し呟いている。
光を失った虚ろな瞳は、遠くの炎をぼんやりと眺めていた。それしかやることが見つからないからだ。

「会いたいよ」

何時間も待った。
堪えて、堪えて、堪えて、長い夜を乗り切る。
この間まで家族みんなで寝ていたが、なんだかとても昔のように緑芽は感じた。

こんな最悪な日だろうと、朝はいつも通りやってくる。朝を迎える頃には、雷は嘘みたいに鳴りやんでいた。
しかし、雷と共に沢山の命まで消えてしまい、依然国は悲哀に満ちている。

緑芽は泣き疲れ、横になって家族を待ち続けた。きっと見つけてくれると信じて。きっとまた一緒に過ごせると思って。

しかし次の日になっても、その次の日になっても、家族は緑芽の前に現れなかった。通り過ぎるのは、野良猫と鳥だけだ。

三日間飲まず食わずで、少年に限界が近付いている。声も出すのも辛く、呼吸をするので精一杯だった。
このまま死んでしまうのでないか、と幼いながらに察し、全身に鳥肌が立つ。

「僕は死んじゃ…うの…？」

疑問符をつけたところで、返事をしてくれる人は誰もいない。それは数日間の経験上、緑芽はよく知っている。

今日もきっと誰も…

「死なないよ」

――声が、した。
力強い男の声が、確かにしたのだ。

「え…？」

「ガキ、よく生きてたな。俺は”初一　壱朗”だ、もう心配しなくていいぞ。…お前ら！ガキがまだ生きている。至急、回復部隊は来い！」

「はっ」

茶色の髪をし体格の良い男が、誰かに指示をした。
何者なのか詳しく聞こうとした緑芽だが、今までの疲労がついに限界突破し意識が飛ぶ。

「回復を急げ！」

この日が、緑芽と［朱］の初対面となった。

＊　＊　＊

08

＊　＊　＊

――『……が』

――『りょ…が…』

誰かの声が頭でこだます。

母さん？父さん？それとも緑芽？…いや、違う。そんなわけない。

オレは［朱］に拾われて、家族に呼ばれるはずがないんだから。

この声は――

「高上…副隊長？」

［朱］の寮である自室で寝ていた緑芽は、ぱちりと目を開けた。

視界には1軍隊副隊長を務める上司、空がいた。

熱もほぼ下がったらしく、頭痛はさっぱり消えている。

「勝手に来やがって…住居侵入罪で訴えますよ？だいたいなんの用だよ、寂しくて死にそうなんですか？ウサギですか？」

「てめ…、仕事終わったからわざわざ様子見に来てやったのになんだその態度！しかも、うなされてたから起こしてやったんだぞ」

昔の夢を見ていた緑芽は、ビクリと息をのんだ。しかし、それを空に悟られたくなく、乱暴にベッドから出て冷蔵庫からジュースを

取り出した。
空はそれを目で追って、溜め息を吐く。
「嫌な夢、みたのか？」
鋭い突っ込みにむせる緑芽。それからイライラした顔で空を睨みつけた。どうしてこういう時だけ冴えているんだとでも言いたげな瞳をしている。
「クソハゲ…」
「なんで分かったか教えてやろっか？…鏡見れば解ると思うけど」
「はぁ？オレは顔に心情が書いてあるほど単純な奴じゃな…――」
鏡に映る自分を見て、緑芽は驚愕した。寝癖はいつものことだが、鏡には何年振りかに見る顔があったからだ。
切なげに涙を流す自分の顔が。
「…え。何で泣いて……は？」
まったく涙に気づいていなかった緑芽は頬に手を当てる。冷たい雫で指が濡れた。
久しぶりすぎる涙に混乱し、どうすれば良いのかさえ解らない少年はとりあえず空のパーカーのフードで拭った。ちなみにそのパーカーは［朱］の隊服である。
「ちょ、コラッ！何してんだよマセガキ！俺で吹くなぁあ」

「うるせぇ！何の役にもなんないんだからタオルにくらいなれよ」

「世のため人のため頑張ってるし！つか敬語、敬語はどうしたよ？俺上司なんだけどっ」

しばらくそのままギャーギャーと騒いでいたが、疲れ始めた二人は自然に終戦する。喧嘩を止めてくれる萌がいない分、いつも以上にくたびれた。

荒い呼吸をしながら、空が静かに問う。

「あのさー緑芽、お前が［朱］に初めて来た時の事覚えてんか？初ー隊長に連れられて来た日のこと」

「何いきなり。当時オレ何歳だったと思ってんだよ、六歳っすよ？記憶にはほぼ無い。あ、でも高上副隊長のアホ面は覚えてます」

「十二歳の可愛い俺まで侮辱すんな。まぁ当時の俺はお前ごときに嫉妬してたから怖い顔してたかも」

「へぇ？そりゃ初耳です」

興味深そうに空を見る緑芽。長い付き合いだが初めて聞いた話で、しかも嫉妬とあれば楽しいネタになるのではないかと密かに企んでいたからだ。

そんな軽い考えで次の言葉を待っていたが、思っていたよりも重みを持った話だった。

「天災…ライトニングデイが起こる前までは、俺の親父は2軍隊副隊長を務めていた。だから特別に子供の俺も軍で修行させてもらっ

てた。［朱］の人達に幼い俺はすげぇ可愛いがってもらってたよ」

懐かしそうに目を細め、ガラスのテーブルの上にあった菓子をつまむ。つられたように緑芽もスナック菓子を口へ運んだ。

昨日萌から貰ったばかりで新発売の唐辛子味は、萌の好みにバッチリ合ったらしく自信満々に渡してきた物だ、

「で、オレが来たことによって、その末っ子の座を奪われてしまい嫉妬した。ってとこですか?そんな可愛らしい時期があったんですね、副隊長にも」

「まーそんなとこだな。なにしろ修行を十歳の頃から始めて、緑芽が来るまでの二年間は撫でられながら育ったようなもんだからさ。なのにみんな、俺なんか空気扱いで、緑芽を新人アイドルみたいにチヤホヤした」

毎日声をかけてくれた人々は緑芽の傍に行ってしまい、いつも遊び相手をしてくれた隊員も緑芽を構いに行ってしまった。

子供とは愛されたがる生き物で、小さな空には緑芽へ嫌悪が生まれる。

空の父親はライトニングデイが原因で足を負傷し、副隊長を降りていた。それ以来はパソコンを主とする軍の情報科で、今も活躍している。

「副隊長そんなキャラでしたっけ?気持ち悪ぃー」

「昔の話だ。今はこれっぽっちも羨ましくないから安心しな」

「…なんか気にくわねぇな。ちなみにオレはガキの頃、あんたが好

きだったよ。あ、勿論そっち系じゃないです気色悪い」

緑芽はべっと舌を出す。その舌を引っこ抜きたい気持ちを抑え、空は大人の対応で無視をした。

代わりに激辛スナックを頬張る。

「緑芽って俺が嫌いなイメージしかないから想像つかないわ。好かれるような事何かしたっけ？」

「多分、副隊長は子供のくせに実力があったから憧れ的なやつじゃないですか？実際オレは高上副隊長を見て軍で働きたいと思ったわけだし。［朱］に恩返しをするためにも強くなって、大切な人達を守るのが良いと考えたんだよ」

「…え、それって俺凄くね？目標の人物じゃん」

「昔の話だ。今はこれっぽっちも憧れてないから安心しな」

「台詞パクんな！つかウゼ！」

何か言い返そうとした緑芽だが、ガチャリという金属音が少年を制止させた。ドアが開いた音だ。

ここは寮のため軍人な事は確かだが、事前に連絡は来ていない。萌なら心配して来てくれそうだが、生憎ここは男子寮。女子の出入りは禁止されている。

「誰？上がっていいですよー」

玄関まで行けばいいものの、面倒で来訪者を確認することなく招き入れた。無用心極まりない。

足音は少しずつ大きくなり、彼らの前に現れた。黒髪黒眼の少年で、挙動不審にキョロキョロしている。

「あれ、夜咲じゃん。お見舞いに来てくれた感じ？」

最近１０軍副隊長に昇任し、今日初の上級会議を終えた夜咲花火がそこにはいた。

何度か緑芽の部屋へ訪れたことがある花火だが、毎回初めてきたかのように縮こまっている。

緑芽は花火にとって心を許せる人だが、それでも申し訳なさそうに隅へ寄った。

「ぶっ、なんでそんな隅行ってんの？」

空が吹き出し腹を抱える。笑われた花火は照れたように目をしばたたかせた。

そんな中でもアットホームな空間は心地の良いもので、男達の頬は緩む。

「緑芽隊長、鍵はちゃんと閉めてくださいね！隊長は訪問者も確認しませんし危ないですっ」

「ノックもしないで、そっから入ってきたお前が言うなヘタレ」

「ち、ちが…、ノックする勇気がなかったんです。誰とも一緒に来てないんで一人でしたし…」

「どんだけヘタレなんだよ！つかノックをしない勇気があるなら大丈夫だろ」

空のごもっともなツッコミが跳ね返る。花火は情けなくすくんだ。やんちゃな笑顔を浮かべた緑芽は「まぁ食えよ」とお菓子を勧める。

一口かじると、舌を刺激する辛味が広がった。

「そういえば。さっき黄昏（たそがれ）隊長が珍しく軍に帰って来てましたよ。リュビアで怪しい仮面を見つけただかで」

「あー懐かしい名前だな。オレが熱でダウンしてるっていうのに、よくもノコノコと…」

若葉の髪を弄りながら、五軍隊長”黄昏（たそがれ）　夕（ゆう）”の顔を思い出す緑芽。しかし浮かぶのは目が陰に隠れる大きいキャスケットに、市松模様のマスクだけ。顔は一切解らず、瞳の色すら見た者はいない。常に携帯を使っていて、スライド式やタッチ式の携帯を五台所持している軍一の不思議な男。

彼は五軍隊長という大切な座にいながらも、趣味であり仕事でもある情報収集をするために国中を飛び回っている。軍には月に一度帰って来るか来ないかのペースだ。上級会議もほぼ代理が出席している。

「それにしても仮面ってなんだかなぁ。イマドキ流行んないぜ。つかさ、黄昏って…何歳なわけ？」

緑芽は椅子にもたれ掛かり、だらりと身体を預けた。今更すぎる質問だったが、誰一人答えない。――答えられなかった。

しばしの静寂に包まれたが、空が無表情で発言する。

「…ＮＧ用語だろ。知らぬが仏」

「僕もアウトゾーンだと思います」

「なんか…。うん、オレが悪かった」

バリバリとスナックを頬張りながら話をなかった事にする男達。余計な事は知ると大変な目に合う。これは軍人の鉄則であり暗黙のルールだ。

空と緑芽からすれば夕は部下だが、不可解かつ交流の少ない彼に、年齢を教えろだのと命令をするのは流石に気が引けなかなか難しい。

――ラーンランラーラーラー…♪

どこかで聴いたことのある歌が、どこからか鳴り響いた。その音は空のポケットから流れている。空は手を突っ込んで黒い携帯を掴み、そのまま耳へ移動させた。

「はい、高上です」

どうやら着信音だったらしく、仕事モードの声で応対する。

『初一だ。いきなりなんだが、明日も急きょ上級会議をする。だいぶややこしい予告状が来てしまってな…。［エレガントガーデン］が危険だ。気になるだろうが詳しい事は明日説明するから全隊長・副隊長に知らせておいてくれ』

「そりゃまた恐ろしい。貴族の町…エレガントガーデンが絡んでいるとは…。とにかく了解しました」

『大層な大仕事になるぞ。よろしくな』

短い電話だったが、重大な問題を知らされた空。かったるそうに

テーブルに伏せ、抑揚の無い声で近くにいた緑芽達へ用件を伝える。

「明日も上級会議だってさ。エレガントガーデンが関係してるらしい」

それを聞かされた二人の少年は、苦い顔で下を向いた。愕然と肩を落しながら、緑芽が舌打ちをする。まだ十六の子供だ。やることがいちいち餓鬼くさい。軍にいなければ、餓鬼大将として活躍していたかもしれない。学校に通っていたら、先生が手を焼く生徒間違い無しだろう。

「貴族絡みって、オレ好きじゃないんだけどー。カラスみたいにガーガーうるせぇし」

「僕も貴族さん絡みは怖くて不得意です。でもこれも仕事なんですよね…」

不快そうな緑芽を花火が慰める。テンションが完全に右下がりだが、これも全て仕事。手を抜くわけにはいかない。

緑芽は首を回しストレッチをし、観念したように無理矢理気合いを入れる。貴族達に一大事があれば、［朱］の未来もかすり傷程度で済むわけがない。

「あーもう、スッキリしたいからシャワー浴びてくる！」

さっさと浴槽へ向かった緑芽を見送り、空が立ち上がった。明日の会議を控えているからか、何歳か老けたように花火は感じた。彼らは四歳しか変わらないが、責任と負担の比は比べものにならないだろう。

「んじゃ、もうこんな時間だし俺帰るけど、夜咲はまだいるか？」

「いえ、僕も自室に戻ります。初の上級会議を終え胃痛がなくなったと思ったら明日もなんて…。早く休んで胃に穴があかないようにしないと」

「はは、お前も苦労してんな。ゆっくり休めよ」

揃って玄関へ向かい、軍の茶色ショートブーツを身につける。扉を開けると、温度の高い風が全身を抱擁した。

一年中暑いアセソルで働く［朱］の隊服は、通風の良い生地で作られている。しかしいくら風通しが良い服でも、黒い長スボンは精神的に蒸し焼きになりそうだ。空はパーカーを脱ぎ、腰に巻いた。

「太陽が沈んでても、此処はホント暑いなぁ」

月も熱を発しているのではないのかと思ってしまうのは空だけではない。ライトニングデイ後に原因不明の四季崩壊が起きたため季節が無くなってしまい、アセソルの住人にとっては肌寒い秋や冬が懐かしい。暖かい食べ物を食べることも少なく、家族で仲良く鍋を囲む光景も、珍しいものになってしまった。

「白い息とか雪とか、久しぶりに見てみたいもんです」

「アセソルは花なら余るほどあるんだけどな」

身近にあるほど見えなくて、無いからこそ見えるもの。それは重々承知している。

「コタツに入ってお鍋食べたいですね。僕は八歳の時から食べてないので」

「…そうだな」

彼らは本当は解っていた。

天災は誰のせいでもない事も、国が一つにならなくてはいけない事も。

けれどあまりに失いすぎて、現実を背負えなかった。逃げたかった。怖かった。

だから東と西は他人のせいにし、誰のせいでもないとは認めなかった。

その人や町の責任とし、どうしようもない怒りや悲しみを全部ぶつけてしまいたかたから。――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5704v/

巡り廻ってまた君と

2011年11月20日20時06分発行